

Title	進路の選択をめぐる雑談における「悩める就活生」としての 카테고리付随活動 : 異なる道を選択する相手とのやりとりに注目して
Author(s)	高井, 美穂
Citation	日本語・日本文化. 2022, 49, p. 19-42
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/87449">https://doi.org/10.18910/87449</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究論文>

# 進路の選択をめぐる雑談における 「悩める就活生」としてのカテゴリー付随活動 —異なる道を選択する相手とのやりとりに注目して—

高井 美穂

## 1. はじめに

本研究は、日本語母語話者の雑談における価値観の共有のやりとりにみられる規範を、会話分析の手法を用いて明らかにしようとするものである。

私たちは、親しい友人との雑談において、価値観や私見を互いに述べ合うことがある。高井（2019）で述べたように、話し合いを目的とした会話は一般的に、テレビシンポジウムにおける政治家の討論から大学生同士のカジュアルな話し合いまで、フォーマルさの程度や参加者の上下親疎関係にかかわらず、進行役ないしは複数の参加者による開始の挨拶、合図によって明示的に開始されること、終了についても同様であることが先行研究から明らかになっている。他方で、雑談において会話参加者らの私見や価値観が共有される時、そのやりとりがどのように開始され、続けられ、終わられてゆくのか、十分明らかになっているとはいえない。また、日本語学習者を対象とする会話教材で、そうした方法を学習項目として取り上げたものは管見の限り見当たらない。雑談における意見述べの方法は、インタビューやディスカッションにおけるそれとは異なる可能性があり、そうしたやりとりへの学習者の参加を可能にするためには、「雑談でのやり方」というものを明らかにする必要がある。

高井（2019）では結婚相手の年齢をめぐる女子大生の雑談を取り上げ、会話参加者らの価値観の不一致が顕在化した直後にみられた「例外としての経験語り」の分析から、会話参加者らが共-成員性に指向していること、「同じメンバーであるならば、同じ価値観を共有しているはずだ」という規範に指向していることを指摘した。さらに、話題とカテゴリー付随活動（Sacks 1972b）との関連が、

相互に価値観を披露するか否かに関わっているのではないかという示唆が得られたことを述べた。本稿では、異なる会話参加者らによる進路の選択をめぐるやりとりを取り上げ、やりとりが「悩める就活生」としてのカテゴリー付随活動であることを論じる。また、「悩みを語る」という行為を通して、選択する道や価値観は異なっても同じ「就活生」であること、すなわち共-成員であることに指向していることを指摘する。分析結果から、高井（2019）で取り上げたものとは異なる話題や連鎖組織であっても、同様の規範が指向されていることを示す。

## 2. 研究方法

### 2.1 データと分析方法

分析に使用したのは、日本語を母語とする同性の大学生及び大学院生の友人同士 2 者間の雑談（のべ約 10 時間）の録音、及びその文字化資料である。録音は近畿地方の大学の食堂や研究室にて 2008 年から 2009 年にかけて行った。話題の指定は行わず、IC レコーダーの録音ボタンを押した後、自由に行ってもらった雑談を 30 ～ 60 分程度録音した。録音中の飲食も特に制限しなかった。

まず、録音の文字化資料から会話参加者の双方が私見を述べているすべてのやりとりを抽出し、西阪・串田・熊谷（2008）にしたがって詳細なトランスクリプトを作成した。トランスクリプト中の人名等はすべて仮名である。

以上の準備を施した後、二段階に分けて分析を行った。第一段階では、作成したトランスクリプトの各発話に「意向表明」等の行為のラベルを付し、やりとりがどのような行為の連鎖からなるかを分析した。さらに、それらの連鎖組織のタイプを、核となる基本連鎖の第一成分の発話デザインによって分類した。また、それぞれの連鎖組織において、認識上の優位性（Heritage & Raymond 2005）がどちらの会話参加者にあるかを分析した。認識上の優位性（epistemic priority）とは、知識や情報に関わる優位性のことで、どちらのほうがそのことについてより知っているかということを表す。分析にこの概念を用いたのは、どのタイプの連鎖組織が選択されるかということに、このような知識の勾配が関係しているのではないかと考えたためである。

第二段階では、成員カテゴリー化装置（Sacks 1972a）の観点から、やりとり

において会話参加者らがどのように自身や相手をカテゴリー化し、どのような成員としてふるまっているのかを分析した。成員カテゴリー化装置については次節で詳述する。

## 2.2 成員カテゴリー化装置

成員カテゴリー化装置とは、少なくとも一つのカテゴリーと一人の成員を含む母集団に適用される成員カテゴリーの集合と適用規則からなるしくみである (Sacks 1972a)。カテゴリーとは、「主にある社会の社会成員が自分や他の社会成員に対して与える分類あるいは範疇分けのためのことば」(山崎 1994:11)を指す。カテゴリー集合の例には、人生段階 {赤ん坊, 幼児, 少年, 青年, 中年, 老人, など}、家族 {父, 母, 子, など}、性別 {男性, 女性, など} などがある (Sacks 1972a、串田・平本・林 2017)。

成員カテゴリーの適用規則には一貫性規則と経済規則がある。一貫性規則とは、同じ母集団内の人をカテゴリー化する際には同一のカテゴリー化装置の中の同じカテゴリーまたは別のカテゴリーを選択するという規則である。そして経済規則とは、ある人をカテゴリー化するのに用いるカテゴリーは一つで十分である、という規則である (Sacks 1972a)。

カテゴリー化の方法の一つは、カテゴリー名を用いて発話を組み立てることである (串田・平本・林 2017)。例えば、ある人物を他の成員が「先生」と呼ぶことによって、その人物が「先生」としてカテゴリー化されることなどがこれに当たる。もう一つの方法は、カテゴリーと特定の述部とのあいだに存在する規範的結びつきを利用することである (串田・平本・林 2017)。

次の断片 (ア) は、女子大学生 2 人の会話である。2 人は同じ大学に通う友人同士で、同じコールセンターでアルバイトをしている。下の断片では、アルバイト先の同僚が黒いマニキュアをしてきているのを見たというみのりのストーリーテリングに対する静香の反応の部分である。静香の発話の述部には「ゆわれない」(91 行目)「ゆわれる」(101 行目)という動詞が用いられている。また、みのりの発話にも「ゆわれた」(102 行目)という動詞が用いられている。「職場」という成員カテゴリー化装置を構成するカテゴリー集合において、受身形での

「(服装等について) 言われる」は、指示や注意を受ける立場（ここではアルバイト）としてバイト仲間や自身らをカテゴリー化するものである。

断片（ア）

- 91 静香： → でもゆわれないんだね：マニキュア：.  
 92 (1.33)  
 93 みのり： ほんまや.  
 94 (0.2)  
 95 みのり： [ほんとはだめやっけ.  
 96 静香： [なんか, ↑最近けっこうなんかゆるいと思うけど：,  
 97 : なんか, でも：, (0.72) なんか, >べつにく, 黒いマニ  
 98 : キュアがだめとか, そうゆ：よ, ゆうのゆってない  
 99 : けど：, やっぱ一応ある程度オフィスや[からってゆう=  
 100 みのり： [ん：：：.  
 101 静香： → =ので最初にゆわれるやん.  
 102 みのり： → ん：ゆわれた：.

カテゴリー化の分析を行う際のもう一つの重要な概念である「カテゴリー付随活動」(Sacks 1972b) について説明しておきたい。Sacks (1972b) で取り上げられている有名な文がある。2歳9か月の女の子による“story”冒頭の二つの文(“The baby cried. The mommy picked it up.”)である。二つ目の文には所有格が含まれていない(例えば“*Its* mommy picked it up.”というような文ではない)にもかかわらず、Sacks が指摘しているように、この二つの文を聞くと、*「赤ちゃん」*を抱き上げたのはその*「赤ちゃん」*の*「母親」*であるというように聞こえ、また、自身だけでなく、他の母語話者にもそう聞こえるはずだと確信を持って言うことができる。Sacks が論じているのはそのしくみである。

「赤ちゃん」と「母親」は「家族 {赤ちゃん、母親、父親・・・など}」という同じカテゴリー集合に属するものとして見なされる。その一方、「赤ちゃん」は「人生段階 {赤ちゃん、子ども、大人・・・など}」というカテゴリー集合の要素でもある。つまり、「赤ちゃん」という語単独だけでは、どちらのカテゴリー化

装置を用いたカテゴリー化が行われているのか、判別することはできないのである。ところが、“The baby cried.”という発話を聞いたとき、私たちはこの“the baby”が「家族」ではなく「人生段階」というカテゴリー集合における「赤ちゃん」であるというように想定することができる。その理由を、Sacks はカテゴリー一付随活動という概念を用いて説明している。

カテゴリー一付随活動とは、特定のカテゴリーに結びついた行為として一般に認識されているいわばステレオタイプのようなものである。多くの行為は、ある特定の成員カテゴリー集合の成員である成員によってなされると見なされる。例えば、「泣く」という行為は「人生段階」というカテゴリー集合において、「赤ちゃん」というカテゴリーに結びついた活動である。他にも、高木・細田・森田(2016)では「井戸端会議」―「主婦」、「飲み屋で一杯」―「サラリーマン」という例が、串田・平本・林(2017)では、「子ども」―「遊ぶ」「だだをこねる」、「大学生」―「勉強をする」といった例が挙げられている。

本稿では、以上の概念をもとに、会話参加者らがどのような成員としてふるまっているのかを分析する。

### 3. やりとりのしくみ

本稿で取り上げるのは、会話参加者双方が進路の意向を表明しているやりとりである。収集した録音データの中から抽出した二つの事例がこれに相当する。

事例(1)は女子大学生シュウコとキョウコによる会話である。シュウコは企業への就職を考えていたが、進学するのも良いかもしれないと考え始めたことを打ち明ける。一方のキョウコは教員になることを考えている。事例(2)は女子大学院生前田と後藤による会話である。2名とも修士課程の院生であるが、後藤が博士課程への進学を視野に入れている一方、前田はさらなる進学は考えていない。このように、両事例は会話参加者らが異なる進路選択をしようとしている点が共通しており、いずれも図1のような連鎖組織で構成されていた<sup>1)</sup>。

基本連鎖	A: 意向を表明する
	B: 意向を表明する
後方拡張	A: 意志の固さの確認を求める
	B: 意志の固さの確認を与える
	A: 理由の説明を求める
	B: 理由を説明する
	A: 理解を示す

図1 連鎖組織

核となる基本連鎖は、Aの意向表明と、Bの意向表明という一对の発話で構成される。両者の意向の相違が露見すると、後方拡張が生じる。後方拡張では、Bの決意の確認が行われ、さらに理由の説明が求められる。Bは理由説明を私事話りの形式で行い、Aが理解を示すと一連のやりとりが終了する。

このタイプの連鎖組織は、新たな大話題の冒頭に出現し、「第三者の話聞いて思ったこと」を打ち明ける形で開始される。両事例ともに認識上の優位性はどちらの話者にも認められなかった。それゆえ、会話参加者らが等しくアクセスできる事柄が話題化される場合に用いられる連鎖組織であると考えられる。話し手が自身の意見を打ち明けると、聞き手も自発的に、あるいは促されて自分の意見を打ち明けるといったパターンになっていた。

紙幅の都合上、ここでは事例(1)を代表して取り上げる。事例(1)は、女子大学生2名によるやりとりである。便宜上、企業への就職を希望している話者をシュウコ、教員志望の話者をキョウコと呼ぶことにする。録音は3月に行われ、このやりとりの直前には新学期の履修科目数が話題となっていた。

まず、新たな大話題の冒頭に出現するという点について、この基本連鎖とそれに先行する話題との間に断絶が見られることを確認しておきたい。

事例(1)では、次の二つの点において先行するやりとりとの断絶が見られる。第一に、語りの開始前に2秒の間(56行目)が生じている。第二に、語りの話題内容は、それより前の部分と大きく異なっている。この断片より前の部分では、シュウコが新学期に取得しなければならない単位数と、授業数についてのやりとりがなされており、シュウコの発話には、「来なあかん」と非過去のテン

スが用いられている (50-51 行目)。それに対し、57 行目からのシュウコの発話には、「思った」というタ形、過去のテンスが用いられており (62 行目)、やはり時間の隔たりが見られる。また、56 行目で生じた 2 秒の間より前の部分では、「来なあかん」対象が通学先としての大学という広範な場所を指しているのに対し、57 行目で開始された語りでは、言及されてはいないものの、シュウコが勝浦先生の話聞いたのは大学内のどこか特定の場所であると思われ、空間的な隔たりも見られる。さらに、語りの冒頭に「てか」という話題導入の談話標識 (原田 2015) が用いられている (57 行目) ことも、先行話題との断絶を示していると言えるだろう。なお、紙幅の都合上詳述はできないが、事例 (2) ではやりとりの直前に 4 秒の間が生じていること、それ以前には手元のコーヒーカップに書いてある英単語が話題となっておりル形が用いられているのに対し、事例 (2) ではタ形が用いられていたことなどから、事例 (1) と同様、直前の話題との断絶を経て開始されていると言える。

#### 事例 (1) [進路 1] <sup>2)</sup>

- 47 シュウコ : 後期, (0.38) 4回で6コマ取って,  
 48 キョウコ : はいはいはい.  
 49 (1.4)  
 50 シュウコ : までも週3くらいは>絶対<来なあかんやろ. 週4ぐ  
 51 : らい [来なあかん.  
 52 キョウコ : [ん:.  
 53 (1.9)  
 54 キョウコ : [うわ:. [就活もせないかんのに.  
 55 シュウコ : [そのわりに[( )  
 56 ⇒ (2.0)  
 57 シュウコ : → はあ: (0.2) てかなんかさ, 勝浦先生の話聞いて  
 58 : なんか, (0.3) アズも, >アズサとかも<聞いたつ  
 59 : たけどさ,  
 60 キョウコ : ん:  
 61 (0.4)



- 62 シュウコ : → なんか院行ってもいいかなって思ったけど、  
 63 キョウコ : ほんま行くん自分。  
 64 シュウコ : >でも<院行くってなったら何するん?¥わたし¥。  
 65 : [hhh.h::  
 66 キョウコ : [hhh  
 67 : え、あれさ、前↑シュウコがゆっとったっけ?なんか  
 68 : 院,院出て,  
 69 (1.2)  
 70 キョウコ : だれがゆっとったっけあれ。  
 71 (1.25)  
 72 キョウコ : にじゅう,(.)院出たらにじゅうなんぼとかなる  
 73 : [とかって  
 74 シュウコ : [あそそそシュウコや=  
 75 キョウコ : =° シュウコがゆっとった。°  
 76 (1.0)  
 77 シュウコ : >だって<院>出たら<25やで?  
 78 (0.2)  
 79 シュウコ : でも、なんか一般職と総合職ってゆうのがあって、  
 80 キョウコ : ん:  
 81 (0.4)  
 82 シュウコ : えっ企業に入るんやっけ、先生なるん。  
 83 キョウコ : (あ)たし先生なる。  
 84 (.)  
 85 シュウコ : もう絶対?  
 86 キョウコ : → >もう<絶[対なる。

では次に、基本連鎖の第一成分をなす進路の意向を表明する発話が、どのように組み立てられているかについて述べる。

事例 (1) (2) は、細部の違いはあるものの、「てか/でも+なんか+【第三者】の話(を)聞いて」という共通の **preface** をともなっていた。ここでは、進路の意向表明が「第三者の話(を)聞いて思ったこと」として語られていることに注目する。そして、この発話に登場する第三者が、語りにおいて相互行為上どのよ

うな役割を担っているのかを考える。

事例(1)では、シュウコが大学院への進学を可能性の一つとして考え始めたことを語る際に、そのきっかけをもたらした人物として「勝浦先生」を登場させている(57行目)。また、事例(2)では、後藤が博士後期課程への進学をめぐる話題を開始する際に、先輩である「佐々木さん」を登場させている。「勝浦先生」、「佐々木さん」はいずれも名前で示されていることから、話し手はもちろんのこと、聞き手も認識できる人物として扱われている(Sacks & Schegloff 1973; 2007)ことが観察できる。また、聞き手の方も、「勝浦先生?」と聞き返したり、「誰?」と説明を求めたりしておらず、理解のトラブルは生じていないことから、聞き手の側からも認識できる人物として扱われていると言える。しかし、ここではそのことはそれほど重要ではないように思われる。名前の代わりに「先生」や「先輩」というカテゴリー名で登場させたとしても、勝浦先生や佐々木さんがこの発話において担っている役割に大きな変化はないように思われるのである。

では、この第三者がこの語りにおいて担っている役割とは何であろうか。事例(1)の「勝浦先生」つまり教員は、進路に関して会話参加者らより知識または経験を有することが一般的に期待される人、すなわち認識上の優位性を有する人である。例えば、学生が進路について相談したり助言を求めたりする相手として、私たちがまず思い浮かべるのは、教職員や両親、先輩など年長者であろう。後輩やバス停などでたまたま居合わせた人になりゆきで相談することはあっても、そうした人たちは、真っ先に相談相手として思い浮かべる人ではないはずだ。

先述のように、この語りは新たな大話題として開始されており、先行する話題との間に断絶が見られる。したがって、まったく新しい話題を始めるには、「なぜ」「今」「その」(Why, that, now?)話を始めるのか、という問いに対する説得力のある解が必要となる。「今日」のような比較的近い過去の時点で聞いた第三者の話は、その解として利用できるリソースであると考えられる。事例(1)(2)における第三者はいずれも認識上の優位性を有する人物であり、それ以外の第三者、例えば同級生のように認識上の優位性が会話参加者らと同等であると思われる人物や、後輩や弟、妹といった認識上の優位性が会話参加者らの方にあると思われる人物の話がリソースとして用いられた事例は、筆者の保有するデータの中

には見当たらなかった。そのことをもって、認識上の優位性を有する人物のみがこの preface における【第三者】として利用可能であると断定することはできないが、少なくとも、「ある人から話を聞いて、このように思った」というストーリーが語られるとき、その「ある人」がそのことに詳しい人であったならば、その人がなぜ登場したのか、聞き手が理解することは容易である。その意味において、勝浦先生や佐々木さんはランダムに選ばれたのではなく、必然性をもって登場させられている、とすることができるだろう。

なお、この第一成分を受けたもう一方の会話参加者が「進路の意向を表明する」発話には、事例（1）（2）ともに、短く、最小限の回答のみを含む言い切りの形で、迷いなく流暢に産出されているという特徴が見られた。第一成分の話し手と異なる進路が表明されているにもかかわらず、非選好応答<sup>3)</sup>の特徴は見当たらないのが特徴的であった。一方で、この意向表明の後には事例（1）（2）に共通して後方拡張が見られた。しかも、そこで行われているのは、決意の固さの確認という、修復の求めであった。

事例（1）85行目のシュウコの発話は「絶対」という副詞を含み、上昇イントネーションで産出されている。この発話が行っているのは、相手の決意に揺るぎがないかどうか確認を求める行為である。

キョウコの意向表明（83行目）は言い切りの形であったが、シュウコがさらなる格上げを求めていることは興味深い。さらに興味深いのは、事例（1）（2）ともにこの「意志の揺るぎなさの確認」が行われた後、理由語りが行われている点である。理由を語っているのはいずれも、揺るぎのない意志を述べた話者である。一見、意志が固く悩みがないように思われた会話参加者のほうが、理由を追及されることにより、次第に悩みを吐露していくようなやりとりとなっているのが特徴的であった。

両者の共通点としてもう一つ指摘できることは、固い意志を表明した会話参加者の進路選択の方針が、いずれも消極的な選択によるものであるという点である。事例（1）のキョウコが教師になりたいのは、企業に就職したくないからだという。また、事例（2）の前田が博士後期課程に進学したいと思わないのは、「まだ行く気になれない」という消極的な理由である。両者ともに、それがよい

のだという積極的な選択の結果ではないという点が共通している。

そこで次章では、成員カテゴリー化装置の観点から後方拡張を分析した結果を述べ、この後方拡張が、「進路の選択は異なっても、同じ就活生であること」に指向したカテゴリー付随活動であることを指摘する。

#### 4. 「悩める就活生」であることへの指向

事例(1)では、一見、意志が固く悩みがないように思われたキョウコが、シュウコに理由を追及されることにより、次第に悩みを吐露していきようなやりとりになっている。

実は、この理由説明としての私事語りは、非常に長く続いているという点で特徴的である。本章では、この私事語りにおいて、「同じ成員(メンバー)ならば、同じような価値観を持っているはずだ」という規範的期待が共有されていること、したがって「そうでないならば、何か理由があるはずだ」ということが問いになっており、私事語りはその説明(account)として機能していること、特別な理由があっても価値観が違うけれども、やはり同じ成員なのだ、ということの主張になっていること<sup>4)</sup>を論じる。

後方拡張におけるキョウコの私事語りは、次のような展開をたどっている。

理由① 人見知り → 理由② 家族の影響 → 理由③ 競争社会への嫌悪感

以下、理由①から順に見ていく。この部分は、シュウコの追及を受けてキョウコが理由を語る、という構造になっている。

キョウコが語っている理由は、「研修などで知らない人と接するのが嫌」なこと、「知り合った人全員とは仲良くなれないため、組織が大きくなるほど『微妙な関係』というものが生まれやすくなる」ことである。しかし、この理由は、シュウコによる明確化要求(106行目、114行目、125行目)や不同意(102-103行目、135-136行目)を何度も受けており、理解は得られていない。

## 事例 (1) 〔進路 1〕理由①人見知り

- 96 シュウコ : ⇒ 「なんで?そんなに人見知り」なん.
- 97 キョウコ : ほんまなんか最近,
- 98 シュウコ : ¥人見知りすぎやろ¥.
- 99 キョウコ : 「知らん人と」接するのが嫌で,
- 100 (0.2)
- 101 キョウコ : ま : >[そんなことゆつとったらく
- 102 シュウコ : ⇒ [え,「別に」じゃな:い? だって,「そんな,
- 103 : ⇒ 感じ」せえへんけどな:.
- 104 キョウコ : そお:, 見えないように, (0.25) 努力したんや
- 105 : たぶん[自分は.
- 106 シュウコ : ⇒ [嫌なん?嫌° ってこと?じゃあ° .
- 107 (0.74)
- 108 キョウコ : なんか,
- 109 (0.77)
- 110 キョウコ : どうせは, 全員とは仲良くなれんやん, 絶対に.
- 111 (1.2)
- 112 キョウコ : やけど, 「何てゆうんやろ, (0.46) なんか,
- 113 (0.3)
- 114 シュウコ : ⇒ 「しゃべる, しゃべるっ」てゆうか, 「しゃべる」の
- 115 : が嫌なん?
- 116 (0.37)
- 117 キョウコ : やしゃべるのはいいんやけど,
- 118 : ((通りがかった人物に)) あバイバイ.
- 119 シュウコ : ((通りがかった人物に)) バイバイ.
- 120 キョウコ : そ, そこだけの, 付き合いならいいけど, (0.48)
- 121 : なんかそれからずっとつ, (1.0) つづいてく :
- 122 : 同じやけど, でも全員とは仲良くなれない, んも:,
- 123 : ゆまく, うまいこと言えんけど,
- 124 (0.75)
- 125 シュウコ : ⇒ う, だか, 「浅い」関係が嫌ってこと?
- 126 (0.23)

- 127 キョウコ : うんうんうんうん. 浅い関係とあと° 微妙な関係  
 128 : が嫌なん° .  
 129 (0.24)  
 130 シュウコ : 微妙な関係は絶対嫌やけど,  
 131 (0.7)  
 132 キョウコ : でなんかそうゆうあの, 大きくなればなるほどさ,  
 133 : 微妙な関係は生まれやすくなるやん.  
 134 (0.9)  
 135 シュウコ : ⇒ ° たしかに° . ↑でもさ, 研修とかってさ, そんな,  
 136 : ⇒ そんなやん.  
 137 (1.0)  
 138 シュウコ : ま, でもシュウコが嫌なんは, なんかその, (0.6)  
 139 : 人見知るから>とかじゃなくて<, かライバル:  
 140 (0.25)  
 141 キョウコ : あ::[:  
 142 シュウコ : [やんか?[ゆうたら. みたいなんが:]嫌.  
 143 キョウコ : [う:んそれも嫌それも嫌.]  
 144 シュウコ : でもほんまはそんなんじゃないんかも° しらん  
 145 : けどな° .

この後の位置では、キョウコのより長い私事語りが行われている（理由②）。この語りは、キョウコの家族に関するものである。

まず、147行目から160行目にかけては、祖父母、両親全員が教師という家庭環境で育ったことが語られる。明言されていないが、165-166行目で「そうゆうの見とるから小学校の先生にはなりたくなくて」と述べていることから、キョウコの家族はおそらく小学校の教師であると思われる。キョウコは、身近な家族の様子で見聞きしたことから、小学校の教師を進路の選択肢から外したことを明らかにした後、高校時代に「いい先生」に出会ったことを述べて、高校の教師を第一志望として考えていることをほのめかしている（168-169行目）。

178行目からは、教師一家において例外的に教師にならなかった銀行員の姉についての語りが始まっている。「会社がどうたらこうたら」（185行目）の部分は、

批判めいた口調で発話されており、聞き手であるシュウコは語り手キョウコの口調から、キョウコの姉の話が愚痴のようなものであることを察している（192行目）。

両親や祖父母の職業についての一連の発話において「企業」（151行目）「先生」（153行目、155行目）というカテゴリー名称が対比的に用いられていること、それに後続する姉の職業に関する発話において「会社」（185行目）というカテゴリー名称が見られることから、キョウコは姉の勤め先である銀行を「学校」に対する「企業」としてカテゴリー化しており、姉の不満は姉の職場固有のものではなく、（学校ではない）「企業」に勤めているから生じるのだと捉えている。このことは、聞き手であるシュウコが姉の話を聞いたキョウコの心情を「いろいろ聞くから嫌みたいな？」（192行目）と代弁していることによっても裏付けられる。先行するやりとりにおいて、キョウコは「企業」での研修や人間関係に対する嫌悪感を表していた。シュウコは、キョウコの語りを「企業で働くことに対する嫌悪感の理由」として理解したことを示しているのである。

#### 事例（1）〔進路1〕理由②家族の影響

- 146 (1.8)  
 147 キョウコ : でもなんか,  
 148 (2.3)  
 149 キョウコ : あんまり, こう, (0.3) なんてゆうんやろ,  
 150 (1.2)  
 151 キョウコ : 親は企業に勤めてないし,  
 152 (1.3)  
 153 キョウコ : 両方とも先生 [やねんやんか:..  
 154 シュウコ : [シュウコもそうやねん.  
 155 キョウコ : で, おじいちゃんもおばあちゃんも先生やんか:..  
 156 シュウコ : ん:..  
 157 キョウコ : やけん [なんか, そうゆう仕事しか] 見てな,  
 158 シュウコ : [↑え::::::::::]  
 159 (0.3)

- 160 キョウコ : 見てない[し,  
 161 シュウコ : [＜そうちゃう?＞  
 162 キョウコ : てもなんか, (0.4) <でも>, >なんかやっぱく,  
 163 : それ: (0.2)なりに,そ:の小学校は小学校なり  
 164 : に,>いかんところとか大変なところめっちゃ  
 165 : いっぱいあるんやん,そうゆうの<見とるから  
 166 : 小学校の先生にはなりたくなくて,  
 167 (1.7)  
 168 キョウコ : で,なんか, (0.8) 自分が高校のときにすごい  
 169 : いい先生に巡り合ったっ[てのもあるし,  
 170 シュウコ : [°ん:ん:ん:°  
 171 (1.9)  
 172 キョウコ : See yo:: ((通りがかった人物に))  
 173 (1.2)  
 174 シュウコ : [↓See ya ((通りがかった人物に))  
 175 キョウコ : [で, (0.6)なんか, (2.0)なんやろ,なん>て  
 176 : ゆったらくええんやろな.  
 177 (1.6)  
 178 キョウコ : ほんで,なんかお姉ちゃんが,  
 179 シュウコ : °ん:°  
 180 (0.3)  
 181 キョウコ : 銀行員なんやって.  
 182 シュウコ : °ん:ん:°  
 183 キョウコ : 真ん中のお姉ちゃんが.  
 184 (0.6)  
 185 キョウコ : >でなんかそれでもう<会社がどうたらこうたら  
 186 : °とかゆっとって,なんか°  
 187 シュウコ : お姉ちゃん大学どこやったっけ.  
 188 キョウコ : A大((略称)). (0.5) A大学((正式名称)).  
 189 (1.5)  
 190 キョウコ : なんか,  
 191 (2.3)



- 192 シュウコ : いろいろ聞く, (0.5) 聞く [から嫌みたいな?  
193 キョウコ : [そ:そ:そ:

企業で働くことに対して否定的な印象を抱いているキョウコに対し、シュウコは企業での仕事を「めっちゃ楽しそう」と評価し、同意を求めている（197-198行目）。この発話に対するキョウコの反応は0.2秒の間（199行目）、音の引き伸ばし（201行目）、緩衝表現「なんか」（201行目）によって遅延されており、非選好応答の特徴をともなっていることから不同意であることがうかがえる。

以上のように、理由①と②は聞き手であるシュウコの理解を得るには至っていない。では、このやりとりは一体どのように収束していくのだろうか。上に見たように、企業で働くことにシュウコが肯定的な評価をしているのに対し、キョウコは否定的な評価をしている。重要なことは、このやりとりにおいて問題になっているのがキョウコの意向のほうであるという点である。つまり、教師か企業かという二つの選択肢は、実はこのやりとりにおいて対等なものとはされていないのである。

キョウコの理由は問われている一方で、シュウコの理由は一切問われていない。このことによって、キョウコの選択が理由の求められる少数派であることが可視化される。さらに重要なことは、少数派ではあるがやはり母集団を構成する成員であり仲間である、ということに会話参加者らが指向しているという点である。一方の意向を問題化するのには、会話参加者らが共-成員であることを可視化するための重要な手続きなのである。

以下では、「就活生」のなかで少数派であるキョウコの語りが、多数派であり聞き手であるシュウコの理解を得ている箇所、とりわけ「あー」という知識状態の変化を表すトークン（Heritage, 1984; Endo, 2018）がどのような語りの後に産出されているのかに注目し、上記のことを詳述する。

Endo (2018) は、日本語会話における「あ」「ああ」というトークンが相互行為上どのような役割を担っているかを分析している。分析によれば、「あ」及び「ああ」というトークンの多くが情報提供に対する応答や質問に対する応答において産出され、「ああ」については、質問-応答連鎖に後続する情報提供に対す

る反応や、拡張された説明のターンに対する反応において産出されるという。そして、そうした連鎖環境で産出された「ああ」は単に情報の受け取りを示すのではなく、相手の発話内容に対する深い理解を示すとしている。

以上を踏まえると、理由説明としての私事語りにおいて聞き手の「あー」が産出されている位置は、語り手が語る理由が聞き手の理解を得ている箇所であると考えられる。なお、ここでいう理解というのは、必ずしも賛同を意味するわけではないことに注意されたい。

シュウコの評価(197-198行目)に対するキョウコの反応は、上述の通り遅延されており、シュウコは「企画」や「広告」といった具体的な職種を挙げて、発話を拡張している(200, 202行目)。シュウコの発話が、「同意要求」から「理解」へと転じるのは、キョウコが企業での働き方を「弱肉強食」(206行目)と評価した後、長く引き伸ばされた「あー」(208行目)に続いてキョウコのことを「平和主義」と評価している部分である(210行目)。「あー」は、キョウコの進路選択の理由が「分からない」から「分かった」へと変化したことを表す。シュウコはまた、「平和主義」を「機会が平等に与えられ」ること(212行目)、「自分の好きにできる」こと(217行目)、と言い換えている。キョウコがさらに、「(機会が平等に与えられた中で)自分をどれだけ伸ばせるか」というのがいい、と続けると、シュウコは一段と大きな声で「あー」というトークンを産出し、音を長く引き伸ばすだけでなく、「はいはいはいはいはい」という肯定を表すトークンをゆっくりとしたスピードで、やや笑みを帯びた声で発話することによって、キョウコの真意を理解したことを示して見せている(231-233行目)。そして、210行目で用いた「平和主義」という評価を繰り返している(236行目)。

キョウコの理由語りには、企業＝「弱肉強食」の競争主義、というカテゴリー記述がみられる。シュウコはそれに対して、「弱肉強食」と対照的な「平和主義」というカテゴリー記述をキョウコに適用し、教師ないしは学校をそのカテゴリーに位置付けることによって、キョウコが多数派の選択肢になじまない理由を理解したことを示しているのである。

## 事例（1）〔進路1〕理由③競争に対する嫌悪感

- 194 (0.4)
- 195 キョウコ : なんかもあ、企業には企業なりの楽しさみたい
- 196 : なんはあると思う[けど、
- 197 シュウコ : [え=でもさ、↑テレビとか
- 198 : >見とったら<めっちゃ楽しそう!>じゃない?
- 199 (0.2)
- 200 シュウコ : <企画とか>.
- 201 キョウコ : ん:::::>でもなん[か<
- 202 シュウコ : [<広告とか>.
- 203 キョウコ : そうゆうのつてさ、(0.2) すごい、° なんて
- 204 : ゆうん°
- 205 (0.4)
- 206 キョウコ : 弱肉強食ってゆうか、s
- 207 (0.2)
- 208 シュウコ : ⇒ あ:[:::::]
- 209 キョウコ : [すごいあるやん.]
- 210 シュウコ : ⇒ 平和主義なんやんな:[じゃあ.
- 211 キョウコ : [そう、たぶんそうなんやわ.=
- 212 シュウコ : =機会が平等に与えられて、
- 213 キョウコ : >ん:ん:ん:ん:<
- 214 (0.2)
- 215 シュウコ : 教師ってそうやん.
- 216 キョウコ : ん::
- 217 シュウコ : 1つのクラス与えられて、自分の好きにできるし、
- 218 キョウコ : [ん:ん:
- 219 キョウコ : でなんか、
- 220 シュウコ : ↑>そや<↓ねんけどな、[あんまり
- 221 キョウコ : [その中で、
- 222 (0.45)
- 223 キョウコ : 自分をどれだけ伸ばせるか>[みたいな、=
- 224 シュウコ : ((第三者に)) [パイバ:イ

- 225 キョウコ : =バイバ:イ<(第三者に)  
 226 (0.3)  
 227 キョウコ : >みたいなのが<いいんやって.  
 228 (0.18)  
 229 キョウコ : なんか,  
 230 (0.3)  
 231 シュウコ : ⇒ [[あ::::::::::[あ::::::::::[<¥はいはいはいはいはい=  
 232 キョウコ : [[>他人を蹴落として,[自分が這い上がった[てっ=  
 233 シュウコ : =はい¥>  
 234 キョウコ : =てゆうのがあんまり好きじゃない<.  
 235 : [までも,<その:,>  
 236 シュウコ : ⇒ [めっちゃじゃあ平和主義やな.  
 237 (1.1)  
 238 キョウコ : なんてゆうん,  
 239 (0.4)  
 240 キョウコ : 入る,° あ°, (0.4) その:,先生になるのにもさ,  
 241 : (0.3)やっぱすごい,やん,[今,最近.  
 242 シュウコ : [ん:ん:ん:ん:..  
 243 (0.3)  
 244 キョウコ : ま:>そうゆうのはあるけん,< まどこかでは(0.5)  
 245 : とお,らな° いかんけど° .  
 246 (1.7)

以上のことから、母集団における少数派と位置付けられる話者が行う「多数派の選択肢ではなく別の選択肢を消極的に選ぶ」理由としての私事語りは、経験に基づくカテゴリー化を含むものであること、また、多数派に位置付けられる話者がそれに対して理解を示すのは、やはりカテゴリー化によるものであることが示唆された。

事例(1)におけるキョウコの意志は固かった。しかし、実は、キョウコは積極的な理由があって教師になる選択をしたのではなく、ただ嫌悪感から企業で働くという選択肢を外しただけである。多くの選択肢の中から一つの道を取り払っ

ただであり、「これ」という一つを選択したわけではない。理由説明としての私事語りにおいて語られているのは、以上のことである。ではこの私事語りを通してなされていることとは何であろうか。

会話参加者らはいま、「進路の選択を迫られる学生であること」をしている。ここでは便宜上、「就活生」と呼ぶことにする。就活生に期待されることはさまざまな「選択」である。進路を選び、業種、職種、企業や機関、雇用形態など多種多様な選択肢の中から、選ばなければならない。選択には悩みがつきものである。会話参加者らは、就活生に期待される「悩みを語る」というカテゴリー付随活動（Sacks 1972b）をしているのである。

事例（1）のシュウコは、第三者の話を聞いて新たな選択肢が加わったことを述べ、「でも行くなってなったら何するんわたし」と悩みを吐露している。それに対してキョウコは、自分には選択肢が一つしかないことを打ち明ける。それは他の選択肢を外さざるを得なかったからである。そしてその、他の選択肢を外さざるを得なかった背景には、家族の影響で好印象を持ってないことや、競争社会になじめない、といった苦悩があったのである。私事語りは、悩みがないわけではないという説明（account）とも捉えられる。

会話参加者らがこのやりとりにおいて終始指向していることは、両者がともに「悩める就活生」であるということである。進路の意向の違いが露呈したあとに行われる私事語りは、「悩める就活生」としてともにふるまうカテゴリー付随活動であると考えられる。

キョウコの私事語りに対してシュウコが理解を示すのが、「平和主義」な性格であることも注目に値するだろう。なぜならば、「平和主義だから、企業で働きたくない」という考えは、シュウコがずいぶん前に言及し、嫌だと述べていた「ライバル」（事例（1）139行目）の対極にあるものだからである。異なる進路選択であっても、相手の私事語りの中に自身の価値観に通じる点を探し、理解を示そうとする点は、共通する価値観があるはずだ、という規範に基づいているのではないかと考えられる。

以上、会話参加者らが一貫して「進路の選択を迫られる学生（就活生）であること」に指向しており、カテゴリー成員「就活生」に期待される「悩む」という

カテゴリー付随活動を通してそれを達成していることを論じた。

以上の議論から重要な点が指摘できる。進路選択には、個人やそれまで生きてきた社会の価値観が反映されるが、異なる選択は、会話参加者らの関係を直ちに脅かすものではない。会話参加者らにとって重要なことは、互いの選択や価値観をすり合わせるのではなく、相手と同じように自分もまた多くの選択肢の中で悩む「就活生」であることを示すこと、相手と自分がともに就活生であることを示すこと、つまりは共-成員性が維持されていることを可視化することである。

## 5. おわりに

本稿では、親しい友人間の雑談における進路の選択をめぐるやりとりを取り上げ、互いに異なる道を選択することを知った会話参加者ら、とりわけ、母集団における少数派とされる話者が、「悩みを語る」という行為を通して、選択する道や価値観は異なっても同じ「就活生」であること、すなわち共-成員であることに指向していることを指摘した。また、分析結果から、高井（2019）で取り上げたものとは異なる話題や連鎖組織であっても、同様の規範が指向されていることを示した。

西郷・清水（2018）の報告によれば、中級から中上級レベルの留学生が日本語での雑談で難しいと感じることで「語彙」（29/106名）に次いで多かったのが、「会話を続けること」（19/106名）であったという。雑談における価値観の共有を通して会話参加者らが目指す大きな方向が「同じメンバーであることを示すこと」であるという、本稿で明らかにしてきたことは、日本語の会話教育において雑談を扱う際の重要な示唆となると考える。

## 注

- 1) 実際には、基本連鎖をなす隣接ペアの間に別の隣接ペアが入り込む挿入拡張が生じている。
- 2) 網掛けは基本連鎖であることを表す。
- 3) 隣接ペアの中には、第一成分に対する第二成分に複数の選択肢があるものがある。例えば、「依頼」に対する「承認」、「誘い」に対する「受入れ」のような話し手にとって好ましい応答は流暢に、間髪入れずに産出されるのに対し、「断り」のような好ましくない応答（非選好応答）には短い間、確認要求、説明要求などによって産出が遅延されるという特徴があることが指摘されている（Pomerantz 1984）。
- 4) この記述は串田（2001）の共通経験の語り合いに関する記述に示唆を受けたものである。

## 参考文献

- 串田秀也（2001）「私は - 私は連鎖—経験の『分かちあい』と共 - 成員性の可視化」『社会学評論』52(2), 日本社会学会, 214-232
- 串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房
- 西郷英樹・清水崇文（2018）『日本語教師のための日常会話力がグーンとアップする雑談指導のススメ』凡人社
- 高井美穂（2019）「日本語母語話者の価値観の共有における成員カテゴリーの利用と実践—ライフプランをめぐる女子大学生の雑談の会話分析から—」『日本語・日本文化研究』29, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻, 86-103
- 高木智世・細田由利・森田笑（2016）『会話分析の基礎』ひつじ書房
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子（2008）「特集：『相互行為における言語使用：会話データを用いた研究』について」『社会言語科学』10(2), 社会言語科学会, 13-15
- 原田幸一（2015）「若年層の日常会話における『トイウカ』の使用—縮約形『てか・つか』に注目して—」『日本語の研究』11(3), 日本語学会, 16-31
- 山崎敬一（1994）「エスノメソロジーと性別カテゴリーの問題」山崎敬一編（1994）『美貌の陥穽—セクシュアリティ—のエスノメソロジー』ハーベスト社, 5-30
- Endo, T. (2018). The Japanese change-of-state tokens *a* and *aa* in responsive units. *Journal of Pragmatics*, 123, 151-166
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge University Press. 299-345
- Heritage, J. & Raymond, G. (2005). The Terms of Agreement: Indexing Epistemic Authority and

- Subordination in Talk-in-Interaction. *Social Psychology Quarterly*. 68(1). 15-38
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge University Press. 57-101.
- Sacks, H. (1972a). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, The Free Press, 31-73 (サックス, ハーヴェイ「会話データの利用法 — 会話分析事始め」G. サーサス他著 北澤裕・西阪仰訳 (1995) 『日常性の解剖学』マルジュ社, 93-173)
- Sacks, H. (1972b). On the analyzability of stories by children. In D. Hymes & J. J. Gumperz. (eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*. Holt, Rinehart and Winston. 325-345.
- Sacks, H. & Schegloff, E. A. (1973; 2007). Two Preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In N. J. Enfield & T. Stivers (eds.), *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*. (pp.23-28). Cambridge: Cambridge University Press.

## 付記

本研究は、科学研究費補助金（若手研究）「日本語母語話者による友人間の雑談における意見・考えのやりとりの研究」（課題番号：JP19K13231、研究代表者：高井美穂）の助成を受けた研究の一部である。

〈キーワード〉 雑談、会話分析、成員カテゴリー化装置、カテゴリー付随活動



## **Establishment and Maintenance of Co-Membership as “Struggling Young Job Hunters” in Discussions between Japanese Friends: Focusing on Interactions among Participants Who Choose Different Paths**

TAKAI Miho

This study aims to enable L2 Japanese learners who have difficulty participating in discussions among friends to engage more actively in talking. This article reports the findings of a study on how native Japanese speakers share their sense of values with their close friends when chatting. I focused on extracts from the audio-recordings of naturally occurring discussions between two Japanese students who are close friends. Using a methodology of Conversation Analysis, I examined (1) how the beginnings of a sequence of a talk on their future careers are made comprehensible to the interlocutor, and (2) what the participants orient for through the sequence of the talk.

The analysis first reveals that the expression “[Discourse marker as a topic-initiator *teka/ demo*] + [the third person (superior)] *no hanashi wo kiite* (I heard the superior’s talk and)” is often used by the speaker to introduce a topic on a future career. Furthermore, the participants orient the co-membership as job-hunters. In the extract (1), *Shuko* confesses that she began thinking of a study in graduate school while she used to think of finding a job in a company, followed by the interlocutor *Kyoko* confessing that she wants to teach in a school and wishes to never work in a company. Despite her fluency and confidence in her response to *Shuko*, *Kyoko* later confesses in her long narrative that her choice has been made negatively, by eliminating other options. When people, especially young students, seek a job, they are required to choose among many options. A struggling experience related to making a choice is an expected activity or “category-bound activity” (Sacks 1972) for job hunters. The analysis therefore implies that native Japanese speakers orient to maintain their co-membership through the category-bound activity when they share their sense of values while chatting with friends.